http://www.agatajinjya.com

あがたの杜

第15号 平成25年11月吉日
発行 あがた神社木の花会

大幣神事 新人幣差（へいさし）の方々から

大幣座幣差　池本将孝

去る6月8日におこなわれました、大幣神事に初めて「幣差」として参加させていただきました。宇治郷の静謐を願い古くから続く神事に参加でき大変喜ばしい気持ちと、この永い歴史と伝統を守る一員になった事の責任感を感じております。大幣は思っていた以上に重く、担ぎながら歩くとなかなかのもので、他の幣差と協力しながら、あがた通り、宇治橋通り、本町通りと移動しました。縣神社に戻り、大幣をいっせいに引っ張りあがた通りを走りぬけ、集まった厄と共に宇治川に投げ入れました。疲労感よりも無事に神事が終了した事の安堵感が残りました。わからない事だらけだったのですが、色々教えて頂いた幣差の皆様に、書面を通じては失礼と存じ上げますが、この場を借りてお礼申し上げます。大学、社会人と生まれ育った宇治を離れている期間が長く帰郷しまだ一年程度ですが、宇治で生業し、大幣神事や地域活動に参加する事で少しでも宇治に恩返しが出来ればと考えております。

大幣座幣差　田中宏季

大幣神事は宇治市で初の無形民俗文化財にも指定された伝統行事であり、その中で参加できたことを大変うれしく思います。今回参加するにあたり、事前の準備や当日の流れなどわからないことも多くあった中で、たくさんの方々に助けられ無事役目を果たすことができました。現代の世の中では、予測不能な事態も起こっているのも現実です。このような無病息災を願う行事を経験して、平凡に暮らしていけることがいかに幸せなことなのだと改めて気づかされました。また、市民の方々の暖かい声援もあり、無事役目を果たせたことを誇りにも感じています。実際に大幣神事を経験し、このような宇治市の伝統行事は今後も続けていかなければいけないし、またこのような機会があれば参加したいと思います。

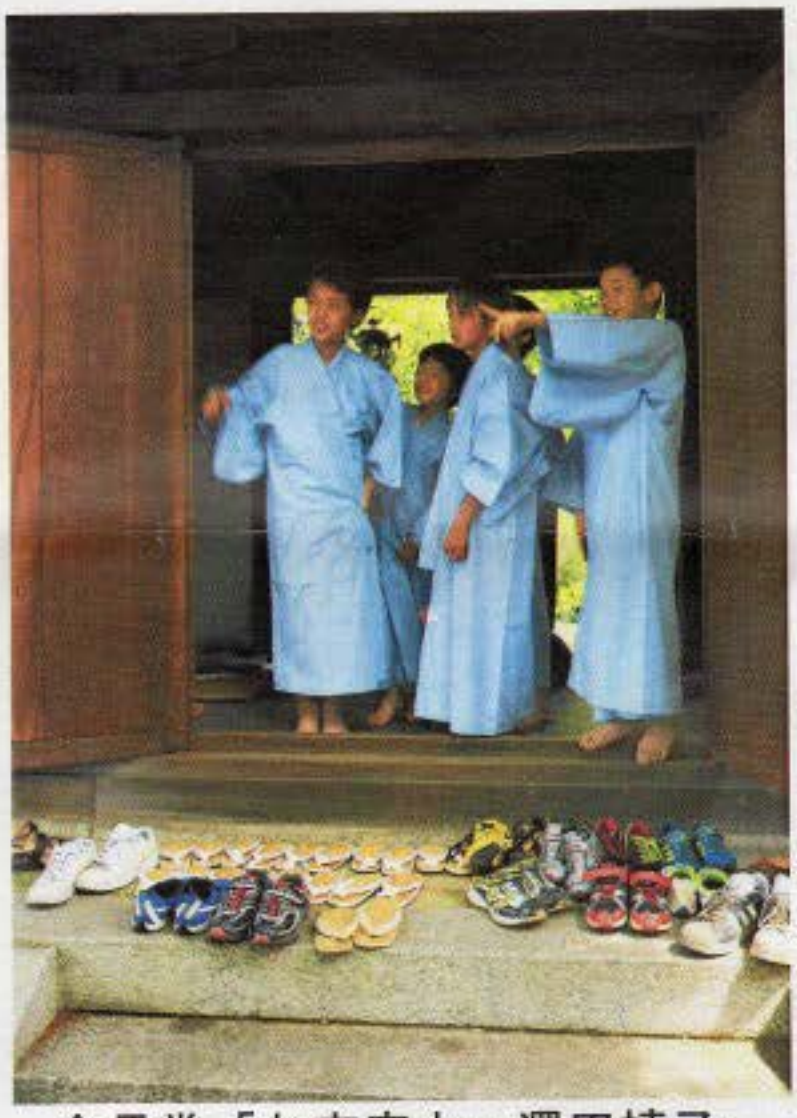
大幣座幣差　稲房　憲

大幣神事には小学生の時に3回参加したことがある。そのときは衣装を着て、道具を持って歩くだけで午前中の授業をサボれてラッキーというくらいでしか思っていなかった。

今回からは幣差としては初めて参加させてもらった。大幣を担いで、ねり歩き、そして最後に県通りを走って橋まで行き、宇治川に大幣を投げ入れる。この大切な役割の一員として緊張感を感じ、先輩方の助けを借りながら無事に終えることができた。小さい頃にカッコイイと思っていた人たちの中に、今自分が加わっているのは不思議な気持ちだ。今回は小学生のとき以来久しぶりに参加させてもらい喜ばしく思うとともに、諸先輩方に教えていただいた神事の大切さを後世にしっかりと伝えていかなければならない責任を強く感じた。

第２回あがたはん写真コンクール入賞作品

グランプリ「辻回し」　澤田充広



会長賞「お支度中」澤田靖子

優秀賞「馬馳せ神事」　猪口貞幸

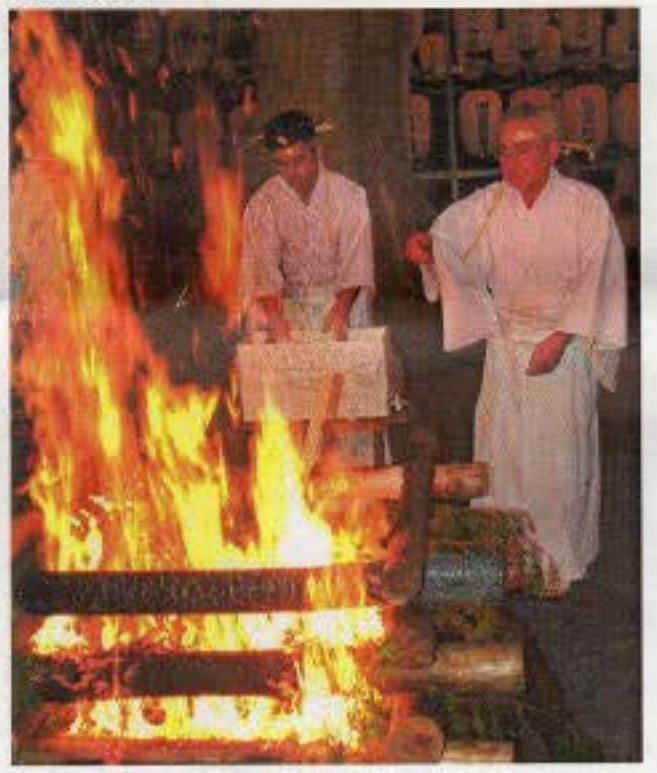
優秀賞「奉納の舞」　永井真知子

第２回あがたはん写真コンテスト

講評　審査委員長　溝縁ひろし（日本写真家協会）

宇治は昔からお茶の産地。縣神社の門前には、のれんを受け継ぐお店が並びます。時折、お茶の香りが境内で感じられることもあります。神社では、一年を通して色々な行事が行われます。中でも京都の深夜の奇祭としても有名な県祭りは、写真愛好家の中でも良く知られています。それらを中心に今回応募された作品を拝見し、祭りのユニークさと昔から伝わる歴史の重みを感じました。新旧がとけあう祭りは、楽しさあふれた作品でいっぱいでした。みな様のレベルの高い作品が多く、選ぶのに苦労した事をひと言つけ加えさせていただきます。

優秀賞「のどかな日」　山崎公男



入選「ゴマ焚き」　太田茂

入選「清涼の夕べ」　北村信隆

入選「大幣祭の朝」　中井正寛

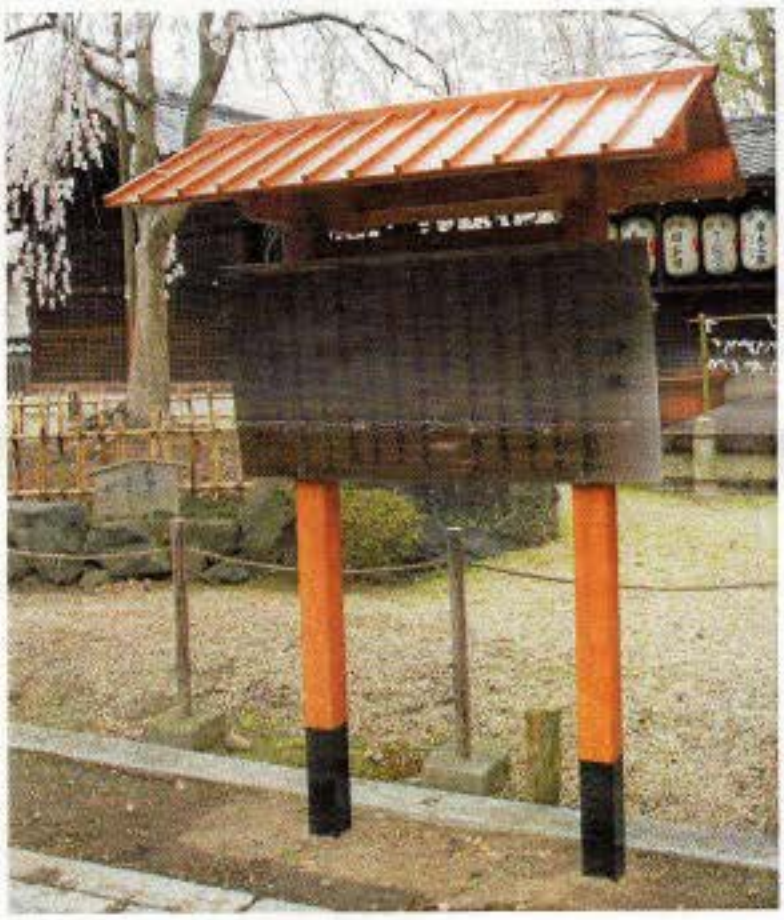
入選「大幣が行く」中川富夫

入選「手作りしし頭」　深井征子

あがたの杜に寄せて　献灯台寄進者　藤田浩彰

この度。このあがたの杜に掲載して下さるとのことで何を書けばいいのだろうと考えておりました。あがた神社木の花会様とは、現在会長をされている上田様のお父様が会長をされている時、父が会計をしておりました。そして上田様がお亡くなりになって、次の会長として父が努めさせて頂きました。何年か努めさせて頂いてから父の事故があり、四年間の闘病生活がありました。そして、昨年9月13日に父が亡くなりました。この度、父が愛したあがた神社様のために何か出来ることがないかと思案していたところ、本殿の両脇にある「提灯台」が古く壊れかけていたので、その台を新調させて頂くことになりました。

その台には、あがた神社様のご好意により柱の裏側に父の名前を入れていただいております。これで父が愛したあがた神社様とずっと一緒にいられるのだなと、家族共々よろこんでおります。本当にありがとうございました。また、これからもよろしくお願いいたします。



神社由緒掲示板寄進者　北村雅夫

我が家は、代々縣神社の御祭神に守られて過ごしてまいりました。その感謝の気持ちから、父は紅白の梅を奉納し、また毎年「茅の輪」の材料である茅や注連縄の材料の藁を提供させて頂いておりました。今は、茅は叔父の北村実が、藁は私が提供させて頂いております。昨年、宮司さんから、本殿前に設置されている神社の由緒書きを掲げた掲示板が傷んできたので、作り替えたいというお話を伺いました。人様にお見せするには、お恥ずかしい愚作でございますが、お役に建てればとの思いから、日曜大工で掲示板を作って奉納させて頂きました。風雨の強い日は、傾いていないか、倒れていないかと気掛かりで、何とか半年近く持ちこたえてくれたので「ほっと」しているところです。これからも地域の守り神である神社に、微力ながら奉賛してまいりたいと思っております。

縣大太鼓つれづれ

縣大太鼓製作者　秋元道弘

どっどど　どどうど　どどうど　どどう　青いくるみも吹きとばせ
すっぱいかりんも吹きとばせ　どっどど　どどうど　どどうど　どどう

（宮沢賢治　風の又三郎）

秋のはじめ、ときおり強く吹きつけてくる風の口真似を歌いながら縣神社にたどりつくと、風音に混じる大太鼓の響きに迎えられた朝七時。田鍬宮司の打つ七・五・三の拍が、この日は秋風の声と聴こえました。和楽器の篳篥（ひちりき）の音を人声に、笛や笙を鳥や龍になぞらえることがありますが、太鼓の音は、生き物でなく風や雪、海鳴りといった自然現象と照応すると感覚されてきたようです。さらに、祭りで重い山車などを動かす力は、太鼓の音でそれを天界から地上へ注入しようという観念や、鼓面に巴文様を描いて、太鼓自体を宇宙の霊的なエネルギーとの交感装置に仕立てるなど、昔の人は霊感が優れていたのかもしれません。霊感ということを神様を感覚する能力と捉えれば、信心深いところのおよそ乏しい私などは全く霊感を欠いた人間なのです。が、目にも見えず、事物という実態も曖昧なイメージをちゃんと物にするまでの全行程で活躍するある特殊な感覚のことも私は霊感と勝手に呼んでいます。設計図や見本の全く無いものを拵えるためにはこの霊感が一番大切です。それは例えば作業の分岐点で、「案ずるより産むが易い」というときの「案ずる」部分を徹底的な集中で行って、工程のずっと先まで矛盾が出ない道を一本だけ見つけるようなことなので、だから物産みが難しい場合にも、容易かったと感じるほどに切り拓くこともできます。四尺大太鼓は、制作工程のほとんどを神楽殿をお借りして進め、縣祭り前に本殿に奉納することができました。巡行用の台座も制作し、大幣神事の先触太鼓として働けたことをこの太鼓はとても喜んでいます。その後本殿への設置状態をより良くするために、本式台座の制作に入り三ヶ月を迎えますが、もう完成目前となっています。私は生来工作が好きで、物作りをしている間はご飯を食べなくても平気で、楽しくて仕方ありません。それでも今回の大太鼓製作は、難しいうえにきつい作業の連続でしたので、辛い、休みたいと思うことが幾度もありました。それを物にできたのは、田鍬宮司、幾人もの総代の方々の神社を支える熱意を感じたり、偶然作業を覗かれて以来この大太鼓の完成を楽しみに度々通ってくださる方が出来たりで、どうしても完成させようと気持ちが奮い立ったからです。縣神社に縁ある皆様のお力の賜物と思い、深く感謝申し上げます。